

ゴーイング・コンサーン

取締役 常務執行役員 安 達 徹

20 世紀末の 1998 年に (財)化学技術戦略推進機構という団体が設立され、当時社長室に配属されたばかりの私は、同機構の分科会に参画することになりました。その分科会での最初のミッションは、21 世紀において化学産業が取り組むべき課題を抽出するというもので、食糧、水、ヘルスケア、エネルギー資源、地球環境等の問題が取り上げられており、正に 2015 年に採択された持続可能な世界を目指す SDGs の目標と合致した内容でありました。

各課題の根本にあるのは、地球の定員を超えて、将来 100 億人に迫ろうかと言う人口問題であると考えます。現在では、気候変動の問題や新型コロナウイルスが中でもクローズアップされていますが、将来的には、より深刻な課題が表面化することが予想されます。

一方、民間企業にとっては SDGs に類似した語句としてゴーイング・コンサーンという言葉がよく使われます。企業が将来にわたって存続し、事業を健全に継続していくという意味を持ちます。一昔前では、黒字決算を継続していくというイメージでしたが、昨今では財務前提に加え、CSR (社会的責任) を果たしていくことがゴーイング・コンサーンの必須の条件となってきています。

当社の CSR 重要課題の第一項目に挙げています「社会課題解決型の製品・技術の創出と提供」を世の中の環境変化に対応してタイムリーに実施していくことが、当社の企業価値を高めつつ、ゴーイング・コンサーンを可能にしていくこととなります。

昨年度の新型コロナウイルス検査試薬のタイムリーな上市などは正にその一例であり、研究開発部門には一番期待したいところであります。

当社は 80 数年の歴史の中で、ゴーイング・コンサーンの危機が何度か有りましたが、その中でも最大の危機は 1992 年からの数年間でした。バブル経済崩壊、中期経営計画の蹉跌、イラン投資の清算等により、会社の借入金売上高を大きく上回る状況となり、1994 年には希望退職募集を行うまでに追い込まれました。

そういった状況下において、当時の田代社長は、リストラだけで縮小均衡に陥るのを避けるため、ビニルチェーンの拡大投資に踏み切りました。しかし、当時、私は財務部に所属しておりましたが、更なる財務体質の悪化を危惧する銀行との設備資金借入交渉は難航しました。期限が迫る中、メインバンクの役員が南陽事業所を査察訪問され、その応対として樋口和夫さん (後に技師長) 他事業所の当時の中間管理職の方々が真摯に説明を行った結果、最

最終的に信用を得ることが出来、無事借入を実行することが出来ました。

メーカーである当社のゴーイング・コンサーンを担保するものは製造、研究開発といった現場の技術力です。多くの社会課題を抱える 21 世紀においても、ゴーイング・コンサーンの実現に、現場の技術者の方々の更なる健闘を期待します。